

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River



カニ

ニは一般に美味なものが多く、特に秋の季節になるとグルメ指向の料理には必ずカニが出てきます。カニの種類は多いのですが、菊池川にいるカニとなるとモクズガニ(山太郎がね)とサワガニだけです。山太郎がねは秋になると川を下って河口付近の海水に放卵し幼生は海中で育ちます。

サワガニはエビ目(10脚目)サワガニ科サワガニ属、日本の固有種で青森県からトカラ列島まで分布します。日本周辺の島々でも生息が報告されています。近縁種はミカゲサワガニ(大隅半島)、ヤクシマサワガニ(屋久島)、サカモトサワガニ(奄美大島)、センカクサワガニ(尖閣諸島、魚釣島)などが報告されていますが、センカクサワガニ以外はいずれも準絶滅危惧種に指定されています。

猿カニ合戦などの話でカニは昔の子どもたちには大変親しみ深い生物でした。特にサワガニは黒褐色で足が赤く、小さくてかわいいので子どもたちの絶好の遊び相手でした。ところで猿カニ合戦に出てくるカニは、猿に固い柿を投げつけられて死んでしまいが、その子供たちが親の仇を討って猿の尻を挟んで毛をむしり取ってしまいました。猿の尻は赤くなり、毛はなく

なり、その毛がカニの挟み足に生えたということですから、その時のカニはモクズガニだったろうかということになります。

サワガニの甲羅は25〜30ミリ、左右の足の先から先まで50〜70ミリです。色は甲羅は黒褐色で脚はきれいな赤がほとんどですが、天草には淡青色のものもいます。住む場所によって白、青、紫褐色など変化に富んでいます。が、周囲の色に影響されるようです。挟み足はオスでは右の方が少し大きい、ときたま左の方が大きいものもあります。ハクセンシオマネキのような差はありません。

雌は春から初夏にかけて直径2ミリほどもある大きい卵を20個ほど生んで腹脚(通称へこ)に抱え込んで保護します。他のカニに比べると非常に大粒なので数が少なく幼生は卵の中で変態します。卵の中で既にカニの姿になつて孵化しますが、その稚ガニは更にまた母親の腹部で保護されながらしばらく過ごします。もやもや動いている稚ガニを腹に抱えて歩き回っているサワガニを時々見かけることがあります。卵を海に放流するのではなく稚ガニを孵化するので広範囲の移動・分布はできません。それで地域集団的な遺伝子レベルの文化が多いようです。



藻類や水生昆虫、ミミズ、パンなど何でも食べる雑食性で、天敵はカワセミ、サギ、イタチ、イノシシ、ヒキガエルなどです。名前のごとく水のきれいな沢(谷)、小川に多く、水質検査する時の指標生物としては5段階のうちの最上の「快適な水環境」としての目安とされています。昼は石の下などに隠れて夜に活動しますが、雨の日など川からはみ出してきて道端や田の畔などを歩き回っていることもあります。冬は水辺の近くの石の下や穴に隠れて冬眠します。食用としては唐揚げにしてビールつまみにしますが、肺ジストマの中間宿主となっていますので料理には十分注意して下さい。

歴史調査の楽しみ方

志口永城跡

8

大田 幸博

(元菊水町史編纂委員会副委員長)

掲

載図をご覧ください。志口永城跡と小乙城跡の縄張り図は、とても似ています。今月は、この話題を取り上げます。

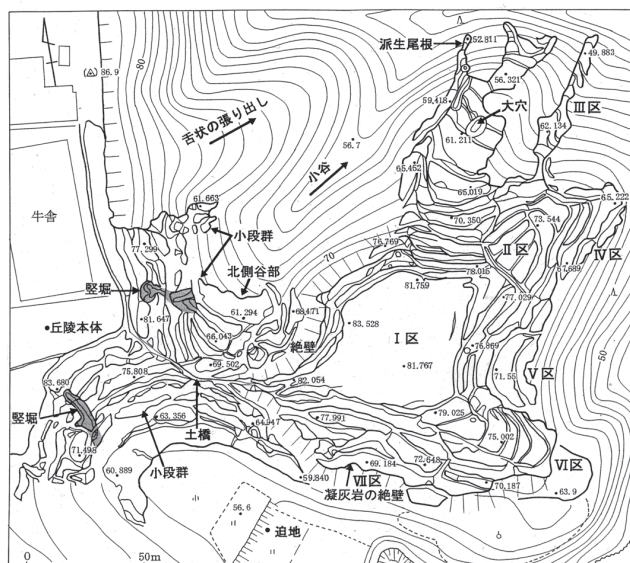
小乙城跡

江田地区の東側に位置する「小乙城」地区に残る城跡です。志口永城跡と同様に、文献未記載ですが、字名から城跡の存在が分かります。

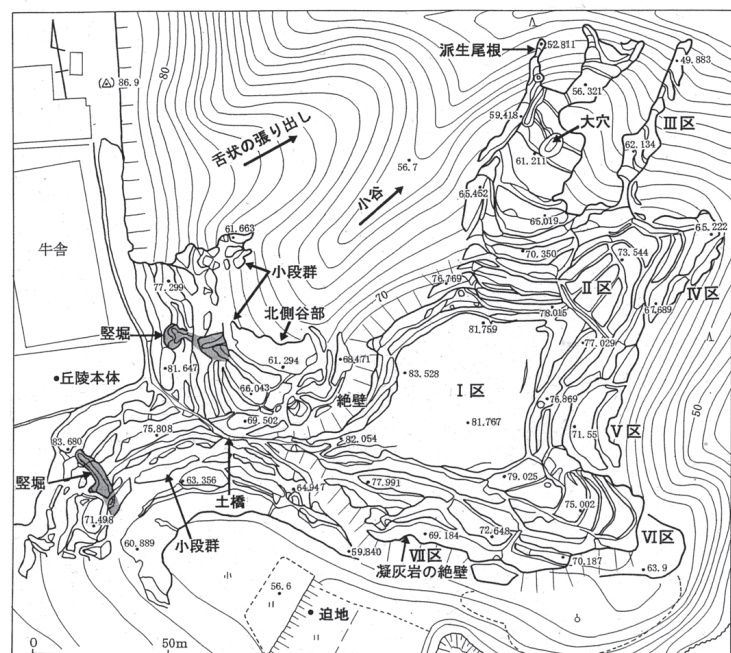
標高82.3mの丘陵末端部が城地です。山城ですが、麓の長野地区からの高低差は、29.6mに留まります。丘頂は、正方形の平地になっており、北縁32m、南縁38m、東縁36m、西縁20mの規模があります。

縄張りには単郭形式で、主郭を核にしながら、同心円状に展開しています。縁部の斜面には、東側を除く三方に小段が連なります。小段は、上面幅が狭く、各法面も急峻に削り落されています。そのために、下段から上段の移動は、容易ではありません。したがって、上位からの攻撃には、大きな効果が期待できます。さらに裾部には、6カ所に張り出し個所があるので、ここに第陣の守備兵を配置することもできます。大手口は、長野地区の南東側にあり、志口永城跡に似た地形です。

このように堅い守りの戦国城で、城跡規模や位置



小乙城跡の測量図



志口永城跡の測量図

関係から、北側に隣接する乙城の出城である事が分かります。江田地区で、江田城跡を軸とする中世城の二つと思われます。

一方で、志口永城跡と小乙城跡は、地図上直線の直線距離で、約3.5kmも離れていますので、「領主の領域支配が、どこまで広がりを持つのか」、この点が気になるところです。同一の領主だとした場合、志口永城跡・小乙城跡・乙城跡の関係は、江田城跡を含めて、どうなるのでしょうか。いたずらに、推論を膨らませてはいけません。歴史調査の楽しみ方は、この辺りにあります。